

鍼灸等研究費研究成果 要約	
研究課題名	最も気になる症状(国民生活基礎調査「健康票」)の治療であるま・はり・きゅう・柔道整復師(施術所)にかかっている割合に関する調査
班長 氏名/所属機関	矢野 忠/明治国際医療大学
班員 氏名/所属機関	安野富美子/東京有明医療大学 藤井 亮輔/筑波技術大学 鍋田 智之/森ノ宮医療大学
成果	
1. 目的	<p>「健康票」における「最も気になる症状」の対処について、報告者らは平成10年度から平成25年度までの6回分の結果を分析したところ、運動器症状である「肩こり」(19.4%~24.0%)、「腰痛」(18.5%~20.3%)、「手足の関節が痛む」(12.2%~13.7%)がトップ3であった。これらの症状に対して、あんま・はり・きゅう・柔道整復師(施術所)にかかっている割合は、ここ15年間は大凡12%~24%の範囲内で推移していることが分かった。しかし、「あんま・はり・きゅう・柔道整復師(施術所)にかかっている」と一括りにされていることから、あんま、はり、きゅう、柔道整復師のいずれの療法にかかったかが不明である。</p> <p>そこで本調査研究は、“あはき”と柔道整復術の年間受療率を調査するとともに「最も気になる症状」に対する対処として、あん摩マッサージ、鍼灸、柔道整復術のいずれを利用したのかを調査することとした。そうすることで、これまで不明であった各療法の利用状況を推定することができるとともに、これまでの「健康票」の結果に外挿し、読み直すことをある程度可能にできるものと考え、調査研究を実施した。</p>
2. 内容	<p>1. 調査方法</p> <p>1)調査対象：20歳以上~100歳未満の日本国民、2)調査のデザイン：住宅地図データベースを用いた層化三段無作為2抽出法による。全国を12ブロック・市郡規模別の層における満20歳以上人口(住民基本台帳値)の構成比に基づき、4,000標本を比例配分した。3)調査期間と実施方法：2018年11月2日~12日の間、調査員による面接により実施した。4)調査内容：(1)回答者の基本情報(性別、年齢、居住地など)、(2)受療の有無、(3)調査票：「最も気になる症状に対する治療に関する調査」とし、質問項目として①29症状中最も気になる症状の有無、②最も気になる症状の治療で利用した療法、③治療の効果、で構成した。5)調査の業務委託：中央調査社に調査を委託した。6)データ処理主として単純集計を行い、必要に応じてクロス集計を行った。また、必要な項目については、95%信頼区間を求めた。6)倫理と利益相反：中央調査社の倫理</p>

	規定に基づいて実施した。報告すべき利益相反の企業はない。
3. 成果/考察	<p>1. あん摩マッサージ指圧療法及び鍼灸療法、柔道整復術の受療状況について：各療法の年間受療率(「現在、受けている」と「現在は受けていないが、過去1年以内に受けたことがある」の合計人数を回答数で割った値)は、あん摩マッサージ指圧療法は17.3%(210人/1211人、95%CL:15.2-19.6%)、鍼灸療法は4.0%(49人/1211人、95%CL:3.0-5.3%)、柔道整復術は11.7%(142人/1211人、95%CL:10.0-13.7%)であった。各種療法の年間受療率を比較すると、あま指療法(17.3%)、柔道整復術(11.7%)、鍼灸療法(4.0%)の順であった。特に鍼灸療法の年間受療率は著しく低くかった。前回の2017年度の調査の4.6%(95%CI:4.4-5.0%)よりも更に減少し、2013年度以降年間受療率の減少に歯止めがかかっておらず、さらに減少することが予測される。</p> <p>2. 受療者がかかった上位5位の症状：あん摩マッサージ指圧と鍼灸にかかった上位5位の症状(①腰痛、②肩こり、③体がだるい、④足の関節痛、⑤手足のしびれ)と順位は同じであった。一方、柔整復術においては、上位2までは同じであったが、専門とする「骨折・捻挫・脱臼」は第5位であった。</p> <p>3. 最も気になった症状上位5位の症状とかかった療法：あん摩マッサージと鍼灸にかかった上位5位の症状は、①腰痛、②肩こり、③体がだるい、④足の関節痛、⑤手足のしびれ、であった。柔整では①腰痛、②肩こり、③足の関節痛、④手の関節痛、⑤骨折・捻挫・脱臼と多少異なったものの、ほぼ同じであった。すなわち、各種療法ともに「かかった症状」と「最も気になった症状」が運動器系症状であったことが示された。ということは、これらの療法にかかる症状は、ほぼ運動器症状に固定化されていることを示唆する結果であった。</p> <p>4. 最も気になった症状に対する各療法の効果について：「非常に効果があった」と「ある程度効果があった」を「有効」とすると、①あん摩マッサージの「有効」は148人(71.5%)、鍼灸の「有効」は34人(69.4%)、柔道整復術の「有効」は93人(65.5%)であった。ただし「非常に効果的であった」の割合が最も高かったのは鍼灸であり、「効果なし」と「悪化」の合計の割合が最も高かったのも鍼灸であり、鍼灸においては二極化の状況を示した。</p> <p>5. 国民生活基礎調査の「最も気になる症状」の対応と本調査の結果との比較検討：筋骨格系の主要な3症状に対して「あんま・はり・きゅう・柔道整復師(施術所)にかかっている」人の割合は、平成10年度から平成25年度までの6回分の結果では、「①肩こり」で19.4~24.0%、「②腰痛」で18.5~20.3%、「③手足の関節が痛む」で12.2~13.7%であった。同様に「手足の動きがわるい」(8.8~12.0%)、「手足のしびれ」(10.0~13.0%)、「体のだ</p>

るさ」(3.4～6.3%)であった。このように国民生活基礎調査では「あんま・はり・きゅう・柔道整復」と一括されているが、本調査から割り出された割合を外挿すると、「腰痛」でかかった各療法の割合は、あま指9.2～10.1%、鍼灸2.4～2.6%、柔整6.9～7.6%、「肩こり」ではあま指12.4～15.3%、鍼灸1.5～1.9%、柔整5.5～6.8%、「手足の関節が痛む」ではあま指4.8～5.4%、鍼灸0.9～1.0%、柔整6.5～7.3%であった。このように比較的あん摩マッサージにかかっている割合が多いことが示された。ただし、国民生活基礎調査の標本数と比較して本調査の標本数が少ないことから偏りが生じている可能性が否定できないことから、ここでは参考値にとどめておく。

以上のことから、あん摩マッサージ、鍼灸及び柔道整復術にかかる症状は運動器症状に集中していることが改めて浮き彫りになった。各療法には、それぞれ治療対象とする症状や効果に特性があることから、三者は異なるものと想定されたが、実態は運動器症状に集中していることは、各療法に対する国民の認知が「運動器」の療法として固定化されていることが示唆された。なお、最も気になる症状への治療効果(印象評価)については、鍼灸において他の療法と比較して二極化(非常に効果ありと効果なし・悪化)の傾向がみられたことから、鍼灸師の質において二極化が進んでいることが示唆された。